

偽りの名譽もとうごめん

今年、日本国憲法が施行されてから70年を迎えます。安倍政権は、戦争法による憲法破壊の道に乗り出し、明文改憲も狙っています。憲法に基づく政治という立憲主義が重大な危機にさらされています。歴史的岐路に立つ日本国憲法の生命力と先駆性について考えます。第1部は、日本国憲法前文と第9条の生命力を考えます。

憲法施行70年 先駆性を考える

第1部 9条は生きています

「息子も、そのうち南スーダンに連れて行かれるのか。助けてくれよ」

雪が舞い、風が吹きすさぶ津軽海峡を臨む青森県の港町。自衛隊員の息子を案じる母親の叫びです。

「自民党の議員もこれくらい言え」

南スーダン国連平和維持活動(PKO)に派遣されている第11次隊は、青森に司令部を置く陸上自衛隊第



正太郎さん(後列右から2人目)が2度目の出征前に撮影した家族写真。前列の妻に抱かれているのは生後1カ月の佐藤さん。

自衛隊派兵の地 首相に怒り 青森

行動する若者に希望

9師団が主力です。泥沼の内戦状態のなか、派兵されています。

陸上自衛隊青森駐屯地(青森市)。若い隊員が周囲を警戒する門前で、白髪まじりのタクシー運転手が顔をしかめました。

「今度は、鉄砲撃たされるかもしれないんだ。そこまでやらせるのか。南スーダンさごっそり連れて行かれて、タクシーに乗る隊員もいなくなっちゃったよ」

青森市から新幹線で十数分。津軽半島北端の今別町



内戦の続く南スーダンに派遣された隊員が所属する青森駐屯地

では、自衛官の60代の父親がまくし立てるように言いました。

「自衛官も国民も一緒にデモする気遣いを見せねばねえ。何の義理があつて、危険な国に自衛隊を送るんだ。安倍総理は派遣をやめろ。国会議員なれば、自民党の者もこれくらい言ってみろ」

「貧しい漁師だった」という父親・正太郎さんは陸軍軍人として日中戦争に出征。無事に帰国しますが、再び召集され、31歳のときにパプアニューギニア東部のブーゲンビル島で餓死しました。

正太郎さんが、中国の戦地でつづつた「従軍日記」の一節です。

「華やかに仮装せられた名譽に束縛され、犠牲を甘受し、盲従しなければならぬ」

「仮装の名譽」とは、安倍首相らが偽りの言葉で、戦死者を靖国の「神」と祭りあげることそのものです。

70年間、一人の戦死者も出さず、一人の外国人も殺さなかつた自衛隊。その歩みが危険にさらされています。佐藤さんは2015年7月、シールズの国会前行動に駆けつけました。「衝撃でした。100年も、200年も憲法を守り、戦争のない平和な世界をつくらうと行動する若者たちがいるんですよ」

「集団的自衛権の名のもと、おぞましい戦争への道を開こうと言つのでしょるか」

下北半島北端のむつ市に暮らす佐藤ミドリさん(73)は、自宅近くの港を眺めながら、

100年も続ける。憲法9条はその希望の鎖をつなぎます。